

財団だより

多摩川

1987. 3 第33号



トノサマバッタ (バッタ科)
体長45-65mm。大型のバッタ
河原の草地に多い。



ウスバアゲハ 多摩川流域では、高尾―五日市―青梅―飯能市を結ぶ線より西側の山地に分布。食草はムラサキケマン。(写真 三島次郎氏提供)

■ 多摩川風物誌 ■

④ 蝶

多摩川の河口から源流にいたる地域内に生息する蝶類は実地調査、アンケート調査、文献等の知見を総合して、8科125種（第1表）と考えられる。（三島次郎他1978）

第1表 多摩川流域の蝶の種数

1. アゲハチョウ科 (Papilionidae)	11種
2. シロチョウ科 (Pieridae)	10種
3. シジミチョウ科 (Lycaenidae)	39種
4. テングチョウ科 (Libytheidae)	1種
5. マダラチョウ科 (Danainidae)	1種
6. タテハチョウ科 (Nymphalidae)	31種
7. ジャノメチョウ科 (Satyridae)	13種
8. セセリチョウ科 (Hesperiidae)	19種
計 8 科	125種

この125種という数値は本州に分布する蝶のおよそ80%、日本全体と比較してもその約50%を産

することを示している。東京という大都会の近くを流れる河川の流域の蝶相 (Butterfly fauna) としては大変豊かなものということができよう。

多摩川の源流には2,000m以上の山々が並びそれを中心に山地性の種が多く生息し、かつ源流、上流域は水源涵養林として、あるいは秩父多摩国立公園地域として自然が比較的良好な状態で保存されており、中流域は丘陵地で雑木林、畑地、屋敷林などが複雑に入り組んで多くの蝶にそれぞれに好適な生息の場をあたえ、下流域には常緑樹も多く暖地性種の進出を可能にしている。また古生層からなる古い奥多摩（秩父）の山系、新しい関東平野等多彩な地史的背景もこのような豊富な蝶相をもたらす要因として見逃すことはできない。

— 後略 —

「多摩川流域の蝶類保護に関する生態学的研究
— ウスバアゲハを例として —」 1981
三島次郎 ((財)とうきゅう環境浄化財団研究助成No.32)



おいらん淵

●おいらん淵の伝説

日本民話の会会員 萩坂 昇
多摩川を愛する会会長

「おいらん淵」は「五十五人淵」ともよばれ山梨県塩山市の丹波川の上流、柳沢川と一之瀬川の合流する近くにあり、武田氏滅亡の陰に散った遊女の悲しい伝説が語られている。

430年もの昔、戦国の世、鶏冠山の黒川には武田氏財源の大半を産みだす黒川金山があり、金掘人足、遊女が集められ「黒川千軒」といわれるほど栄えていた。

天正元年（1573）武田信玄は、駿河の三方が原で徳川家康と戦って勝利したが、翌年、帰国の途路、信州伊那の駒場で病にかかって没した。

信玄の後をついだ勝頼は、織田信長、徳川家康を敵に美濃、三河に兵を進めたが、天正3年三河の長篠の合戦で織田の鉄砲隊の攻撃によって敗れた。勢いにのった織田の軍勢は、武田氏の本拠、甲斐に兵を進めてきた。

追いつめられた勝頼は、宿敵織田信長に黒川金山を渡すまいと廃鉱を決意したが、遊女たちの処置に困った。金掘たちには、なにがしかの金銭を与えて故郷へ帰せばすむが、遊女にまで出す理由はない。それに遊女は、金掘たちから金の産出量、金脈など金山の秘密をきいているにちがいない。それを黒川から出すことは、百害あって一利なしと考えた勝頼に侍大将は、策を与えた。

そのときから日ならずして落合川の淵の上に太い藤蔓で吊った宴席がつくられた。遊女たちは金掘に何ができるかと尋ねたが、知らぬ存ぜぬとい

う。宴席のようなところは夜を日についでつくれ、その落成の宴には、遊女たちが招かれた。

侍大将は、遊女の数を確かめるといった。

「殿のお招きで黒川金山発展のためにつかえたおまえらに慰労の宴を開くことになった。存分に飲み、歌い、踊るがよい」

遊女たちは、夢かとはばかり喜んだ。ご馳走がつぎつぎと運ばれてきた。

遊女たちは酔うほどに故郷の民謡、わらべ唄を競いあって歌い踊りまくった。しかし、ふしぎなことに列席していた武士が一人、二人と逃げるように席を立てて帰っていくのだ。そして、遊女だけになった。

「さすがは勝頼さまだ。こんなおらたちにまで気をつけて下さって……」

宴がたけなわになった。そのとき、ドドドードードと、宴席は、遊女もろとも深い淵に落ちた。鳥たちは驚いてとびたつた。

おそろしい一夜が明けると、淵の上の木には宴席を吊っていた藤蔓がすどい刃物で切られているのだった。

それからこの淵を亡くなった55人の遊女を供養して「おいらん淵」「五十五人淵」と名づけられたという。

いまま淵の上にたつ供養塔には、訪れる人たちがささげる香華が絶えない。

このおいらん淵へは自動車で訪れるしかないが、新緑の奥多摩へのドライブのついでに、この伝説の地を訪れてみてはどうだろう。



私と多摩川



青梅市沢井楓橋附近の多摩川・通称鶺の瀬
(1983.1撮)

書家 村木享子

墨人会の仲間とのグループ展が終った。会期中都心までの往復と書展にともなうさまざまなことながらも終えて十日振りに平常に戻る。今日は、筆をとりはじめて十年目をむかえている地域の自主グループの主婦達と書について語る。

ここ沢井市民センター二階会議室の窓からの風景は初冬に変わっている。眼下の多摩川は透明度を増して音もなく行き、時折り中空を落ち葉が舞う。対岸の杉木立に午前光がさし込み、ひきしまった樹皮の筋まで鮮やかに見える。寸暇をさいて筆をとる誠実な人たち……。都心での数日を過ごしてきた後はこの静けさはことさらすがすがしく、からだ中清澄な空気に染めかえられていくようだ。

昼休み、程近い鶺の瀬の径を歩く。楓橋の向う岸、岩崖に建つ中国風相輪をもった寒山寺のあたりも連休明けの今日は人気がない。多摩川の急流はここで深い淵となる。急な石段を昇りつめ無人の舍利殿の手摺りにもたれて樹間に見下す眺めは深い山の湖の趣がある。この流れを洞庭湖に擬して、古人がここに寒山寺を建てたという話を、十年程前までさきの市民センターの地に建っていた

田三田小学校に学んだ頃誰かに聞いたことがあった。

暫く上流に向って歩く。ここから御岳まで流れは次第に激しくなるが川原はゆったりと広く、大小の岩が無数に点在している。流れに大きく影を落とす沿岸の樹々の葉は散り尽くし、梢のかなたに蒼空が高い。川底を白々と透かして流れる晩秋の水。ゆっくりと流れを遡っていくうちふと足を止めた。ある力が私をそこに止どませたといった方がいい。急流がそこにきて突然おだやかな流れをなす水面につき立つ岩が目を魅いた。高さ15メートル程の三角形をした岩がその垂直の岩面を流れにつき立てている。足を止めさせたのはそれだけではない。ある距離を距てて大きな岩がしっかりと向かい合っている。対峙するふたつの岩がもたらす均衡があたりの空間を強い緊張感によって支配し、点在する大小さまざまな岩が完璧にそれぞれの位置を占めている。水面は鏡の如き静けさ。それはひとつの意志とも思える緊迫した力をもっていた。流れも音も停止したかと思われた。

どれ位その地点に立っていたか、我にかえって再び歩きだすと、忽ちその空間の緊張はくずれ、小さい方の垂直岩は相変わらず頑張っているが、対峙していた大岩も周囲の岩も太古からの風化によるまろやかな相になごみ、黄葉の散り敷く山裾の道へ続いて、背後に連なり重なり合う山嶺とつけ合い、静かな山峡の午後の風景に戻っていった。

この径を私はもう何十回否百回以上歩いているだろう。にもかかわらず今日の発見はひとりひそかにうれしい。

早春、桜の頃、草木萌え立つ五月、静かな秋そして木々の葉が落ち尽くした冬の天空。天地のただ中に永劫の時の流れの静謐を聴く。

窓にひろがる冬晴れの空と山を見ていると気もそぞろになり、いつのまにか多摩川沿いの道を歩いていたりするのである。

甦れ！多摩川

●木炭による水質浄化

山道省三

昨年の末から今年の初めにかけて、八王子、日野、国立の主婦グループが浅川の水質調査を行っているとの記事が新聞に取り上げられた。住民が地域の河川の水質調査を行う例は全国にいくつか見られるから取りたてて珍しくはないが、このグループは雑排水の流れる側溝や水路に木炭を入れた袋を投入し、どの程度の効果があるかを調べようとしている点に注目されたのだろう。この活動に対しては、当財団が一般住民を対象とした草の根研究の分野で研究費を助成しているが、選考にあたってこの点が評価された経緯がある。

木炭は昔から水の浄化、殺菌効果があるといわれ、井戸の神に対し正月のおそなえに木炭を半紙に包んで飾る風習も残されている。

その木炭の浄化効果に着目しネットに入れた炭を排水路に投入したところ、その浄化に顕著な効果がみられたという。2年目の中間報告では水質の分析結果や木炭の変化、浄化方法の課題が示されており、62年度ではいくつかの改良を行いながらさらに実験を続ける予定になっている。またこの研究では家庭での排水、洗剤問題についてアンケートを行い、啓蒙と対策をあわせて進めてもいる。

木炭による水質浄化は、筆者が愛知県足助町の足助川で住民による浄化対策の中で実施したり、横浜市でもトンボ・ホテルの水路づくりの中でも実験的に行われようとしているが、これらも前記の研究がヒントになっている。

木炭による水質浄化。これは手軽でしかも効果の高い方法ではあるが、一時代前はともかく今、木炭を大量に安く入手するのは大変難しくなってきた。とくに都市化の進む地域では技術も材料も手に入れにくい。足助町の場合は専門者がまだいるし、材料にはこと欠かない環境があった。その

ため、木炭はほとんど無料で供給できたのである。ところが東京や横浜ではそうはいかない。

生産、利用、廃棄のシステムを

木炭を作るためには山がいる。多摩丘陵の林の多くはかつて薪炭林の山であった。ところがエネルギー革命によってその需要が減ってから山が荒れたまま、宅地化されたり放置されたりして今日に至っている。そうした山のいくつかは、都市の緑地や公園として残されているが、いわば存在するだけのものとなっている。公園や緑地となった林を切るということに対しては、大変な拒絶反応が見られ、やれ自然保護だ環境破壊だの声で管理者もなかなか踏み切れないとも聞く。しかし良く考えてみると、丘陵の林は定期的な伐採が行われ、それが生産に供されることによって常に活力のあるいい状態が維持されてきたのである。水質浄化に木炭を使うという思わぬ用途が出てきて、木炭をどう入手するか課題となっているなら、実験的に公共の緑地を利用してみてはどうだろう。そして木炭の生産に学校教育なり住民による体験学習という仕組みをつくれないうか？さらに、浄化に使った炭は農地や公園の土壌改良剤として土に戻す。木炭を媒介とした生産・利用・廃棄のシステムはとうてい一人の人間ではかなわぬことで、それを維持するためのサブシステムが組み込まれなければならない。つまり行きつくところ地域ぐるみのシステムにならざるを得ない。

水質の浄化に木炭を使うということによって、その地域の林がどう維持されなければならないか、使った後の木炭をどう有効に捨てるかが目の前で展開されていくことは重要である。水質汚濁の今日の状況は、いつのまにかそうってしまったという目に見えないシステムによるものである。

最近、都市の川は汚れているのが当たり前と考える子供達が増えているそうである。その意味からも木炭を生産することに対しても同様の意義を見出し、研究のワクがさらに広がることを期待したい。

財団の事業紹介

〈研究助成〉

助成集報（第11巻・第12巻）が完成しました。内容は下記の通りです。

助成集報（第11巻）

研 究 課 題	代表研究者	所 属
●多摩川をめぐる自然環境の保全・回復および利用に関する基礎的研究—洪水と濁水の状況を考慮した計画—	立 花 直 美	武蔵野美術大学造形学部助教授
●多摩川における汚染有機物の流出除去過程に関する研究	石 渡 良 志	都立大学理学部助教授
●多摩川における汚濁物質の収支と流下過程	市 川 新	東京大学工学部都市工学科助教授
●増水による河辺植生及び立地の変化と復元に関する研究	曾 根 伸 典	自然環境科学研究所代表

助成集報（第12巻）

研 究 課 題	代表研究者	所 属
●洪水による南浅川上流域の水生昆虫群集の破壊と現存量の遷移	小 倉 紀 雄	東京農工大学農学部教授
●多摩川水系の汚染と自浄に関する総合的調査研究—生物学的にみた多摩川のあるべき姿—	近 藤 典 生	(財)進化生物学研究所理事長
●多摩川における湧水の涵養機構に関する研究—野川流域の場合—	高 村 弘 毅	立正大学文学部教授
●多摩川に流入する丘陵地小河川の流出機構ならびに水質特性に関する研究	田 中 正	筑波大学地球科学系講師
●多摩川水系浅川流域における気温の水平ならびに垂直分布と大気環境との関連に関する研究	佐 藤 典 人	法政大学文学部教授
●府中崖線地域における水系および土壌の重金属公布に関する研究	岡 崎 正 規	東京農工大学農学部助手
●リモートセンシング技術を用いた多摩川流域の市街化と環境保全に関する研究	高 橋 弘	(株)三菱総合研究所社会技術システム部
●降下物の化学組成から評価される多摩川流域の大気環境—降下物捕集体としての杉の樹皮を用いた大気環境評価—	鶴 見 実	東京工業大学大学院総合理工学科助手
●多摩川水域における特定汚染物質とその防止に関する研究	小 椋 和 子	都立大学理学部助手
●多摩川における水塊の挙動を支配する水理条件とその評価	廣 沢 佑 晴	東京大学工学部土木工学科助手

多摩川流域自然保護関係団体の行事のお知らせ

開催日	行事名	主催者	参加方法
4月5日(日)	万年橋上流の自然観察会	多摩川の自然を守る会 ☎0426-36-0902柴田方	9時30分…国鉄青梅駅前集合 参加費200円
5月16日(土)	多摩川の河口自然観察会	同上	9時30分…京浜急行大師線産業道駅駅前集合 参加費200円
4月18日(土)	多摩ニュータウンのカタクリを移植する会	八王子自然友の会他 ☎0426-42-0977畔上方	9時30分…京王線聖蹟桜ヶ丘駅北口集合

※ 詳細は各主催者に問い合わせ下さい。

● 川の用語

③ 都市河川(unban river)

都市の中を流れる川とそれ以外の川が意識して区別されるようになるのは、都市排水による水質汚濁が大きな社会問題となる昭和30年代後半からであろう。都市の中を流れる川は、水質の汚濁や洪水疎通能力を高めるための改修により、生物環境や形状、景観が大きく変化してきた。こうした川を総称して都市河川と表現されるようになった。

河川管理者である建設省は実務上、都市河川を次のように定めている。

- ① 一級河川の指定区間
- ② 二級及び準用河川のうち
 - ① 都市計画法で定める市街化区域に係る河川

② 人口集中地区(DID)人口が3万人以上の都市に係る河川

③ 上記以外の大規模開発(100ha以上)に関連する河川

(「都市河川対策」河川講習会テキスト、1982年)

しかしながら、都市における環境資源としての位置づけから考えると、河川以外の用水路等の水路で上記の地区に係るものは含めていだろう。

そのほか「都市型河川」、「都市中小河川」、「都市計画河川」(都市計画事業で整備される河川)など類似の表現もみられる。

(文責 山道省三)

※ 去る2月14日当財団の事務局が渋谷地下鉄ビル8階から13階に移転いたしました。住所、電話番号は従来通りです。

- ・発行日 昭和62年3月1日
- ・編集兼発行 (財)とうきゅう環境浄化財団
〒150 渋谷区渋谷1-16-14
(渋谷地下鉄ビル内)
TEL (03)400-9142



*印刷所 雄文社 〒336 浦和市常盤9-11-1
TEL (0488)31-8125